



TITLE:

續漢志百官受奉例考

AUTHOR(S):

宇都宮, 清吉; 藪内, 清

---

CITATION:

宇都宮, 清吉 ...[et al]. 續漢志百官受奉例考. 東洋史研究 1940, 5(4): 271-282

ISSUE DATE:

1940-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/145696>

RIGHT:

# 續漢志百官受奉例考

宇都宮清吉

藪内清

一

司馬彪が撰し、劉昭が注補を作つた續漢書百官志の末尾に、百官受奉例といふものがのせられてゐる。この受奉例は注補に引かれた古今注の文に據ると建武二十六年に發せられた詔によつて行はれたものであり後漢の制である。

百官受奉例 古今注曰建武二十六年四月大將軍三公奉月

三百五十斛中二千石奉月百八十斛二千石奉月百二十

斛比二千石奉月百斛千石奉月八十斛六百石奉月七十

斛比六百石奉月五十斛四百石奉月四十五斛「比四百

石奉月四十斛三百石奉月四十斛」比三百石奉月三十

七斛二百石奉月三十斛比二百石奉月二十七斛一百石

奉月十六斛斗食奉月十一斛佐史奉月八斛凡諸受奉皆半錢半穀

いま便宜のために、この受奉例の文をAといふ名で呼ぶことにする。これを一見した人は誰でもすぐに、おかしいぞ、誤りがあるに相違ないと疑ひをいだくはずである。殊に「」のところなどは秩に差があるのに、月奉は同じであるのはいかにも不可解であらう。さらに、もう少し注意をはらふと、一千石・六百石・比六百石の奉がそれ／＼月八十斛・七十斛・五十斛となつてゐて、やゝ均衡を失してゐはしまいかと思はれる點があり、また漢代の官制から見てこの受奉例に何故比千石の月奉がかけてゐるのか疑問となるであらう。

とにかくこの百官受奉例を根據として何か立論しようと思つても、こんなに疑問が起つては困るわけである。それでこれを用ひる前には一應できるだけ嚴密に原型を校定することが是非とも必要である。

ところで、このやうな誤り、或は疑問の點はいつ頃から發生してゐるであらうか。劉氏の嘉業堂藏による景宋一經堂本は元來南宋嘉定元年の刻本であるが、この本によると、千石の奉が月百八十斛となり、尙ほ佐史奉十月八斛などいふ頗るおかしいことになつてゐる他は、前掲Aの文と全く一致してゐるが、この本は少くも受奉例に關する限りでは驚くべき疎本といふべきである。東方文化研究所にも宋板後漢書があるが、惜しいことには志の十八卷以後が缺失してゐて見られない。百衲本二十四史中の後漢書は南宋紹興時代の刊本によつたものであるが、これは全然Aと一致して少しの出入も見えない。

このやうな手續を経た結果一つの考へが浮ぶ。――續漢志百官受奉例の疑問點は少くも北宋の末期、南宋の初期において、すでに決定的に今日見られる形となりそのまゝ現今まで傳へられたものである。――しかるに

杜佑の研究の跡を見ると通典卷三十六後漢官秩差次參照この疑問はすでに、遠く溯つて唐の中期においても明瞭に發生してゐたことがわかるのである。いまその文を適宜採録して左に出すと

○中二千石月百八 〇二千石月百二 〇比二千石月百  
 千石月八 〇比千石 〇六百石月七 〇比六百石月六  
 五十月五 〇四百石月五 〇比四百石月四 〇比四百石月四 〇比四百石月四  
 三百石月四 〇比三百石月三 〇二百石月二 〇百石月一  
 六斛月十 〇斗月十 一斛月十

杜佑の研究が續漢志を根據としてなされたことはこの研究を續漢志と照し合せて、その細注の部分をつくらべてみればすぐわかるのである。杜氏の細注は全く劉昭の注補によつたものである。したがつて、月奉の數字もまた明らかに續漢志の百官受奉例――Aの原型――を根據としたものである。たゞし、比四百石の月奉の項には麗々しくも「後漢百官志」の五字が讀まれるが、これは恐らく宋人の補筆であらう。なぜなれば唐代には後漢百官志などいふ本は無いし、また周知のやうに、續漢志が普通後漢志といはれてあたかも本來范曄の後漢書に附屬してゐたものであるが如く觀られるや

うになつたのは宋以後のことであるからである。(圖書藏宋板通)さて杜佑がその研究に續漢志百官受奉例を使用したとすれば吾々は彼の注意深い記述によつて南宋初以來今日まで傳來せられてゐるその同じ疑問點がすでに彼の時代唐の中期頃において明瞭にあらはれてゐたことを認めなければならぬ。彼は彼の時代に行はれてゐた續漢志百官受奉例の數字が本によつて相違のあることを見のがさず、丁寧につゞ異本の數字を書きつけておいた。すなはち、比六百石の月奉は六十斛とあるが一本には五十斛といふのもあり、四百石の月奉は五十斛だが四十五斛とする本もあり、比四百石の月奉は四十五斛であるが四十斛とする書も傳はつてゐるとしてゐる。彼は比千石の月奉を全然記さず、千石の月奉はAと同じく八十斛となつてゐるが、これは杜佑の使つてゐる善本續漢志すらすでに譌誤を生じてゐたことを示すもので續漢志に比千石の月奉が脱ち、千石の月奉が八十斛とせられてゐることは非常に早い時代からの訛傳であると思はれる。

このやうにAにみられる譌誤はもう唐の時代の中頃にはすでに發生してゐて、杜佑の博學を以つてしても

容易にその正を得ることができない状態にあつたのである。いはんや現今吾々がこれを訂正しようとしても恐らく不可能なのではないかと思はれる。しかるに幸ひにも、この困難はある程度までは克服できさうである。といふのは、杜佑よりは大分前に李賢が後漢書に精しい注を書いて後世を益したが、彼はその光武紀下の建武二十六年春正月の條下に續漢志のAにあたる部分を引用してゐるのである。吾々はこの引用せられた續漢志の文によつて、原型百官受奉例が得られはしまいかといふ希望を持つことができる。左に李賢引く續漢志によつてAを校合した結果を出してみよう。

大將軍三公奉月三百五十斛中二千石中上賢有秩字奉月百八十斛二千石奉奉賢所引無以下同月百二十斛比二千石奉月百斛千石奉月八賢作十斛下賢有比千石九六百石奉月七十斛比六百石奉月五十斛賢作五四百石奉月四十五斛賢作四十五比四百石奉月四十斛賢作四十三百石奉月三十斛比三百石奉月三十斛二百石奉月三十斛比二百石奉月二十七斛賢作無百石奉月十六斛斗食奉月十一斛佐史奉月八斛凡諸受奉皆半錢半穀皆以下五字賢作錢穀各半四字

これによると李賢の引いた續漢志は千石の月奉九十

斛、比千石は八十斛、比六百石は五十五斛、四百石は五十斛、比四百石は四十五斛となつてゐて、Aにみられるやうに誰れでも氣のつくやうな疑問は一應解消したかたちに見られる。それゆゑ、李賢引用の續漢志はかなり精良なものであつたのではないかと思ふ。しかし、これも宋紹興本光武紀注に據るかぎり言得るので一經堂刊宋本や東方文化研究所にある宋本——これは理宗頃の刊本であらうと倉田司書がいはれた。——並びにさういふ系統の本を使用したと思はれる玉海卷百三十、增百官五漢建武などでは、千石の奉は八十斛となり、比千石の月奉は記されてゐない。比千石の秩は兩漢を通じて存在した秩なのに、それが何の首肯しうる理由もなく記されてゐないのはどうしてもおかしい。思ふに一經堂本やその他の餘り精良でない本は、校者が不用意に早い時代から長いこと傳統的な譌誤となつてゐる續漢志のAにあたる部分と照合して、無謀にも削去改筆などしたに相違なからうと思ふ。紹興本注がとにかく比千石の秩を記るし、その奉數をも記るしてゐるのは決して根據のないものでなく、李賢所引の精良なる續漢志には、たしかに比一千石の秩奉は明記せられてゐた

に相違ないと思ふ。十七史商榷卷三十四官奉條參考

そこでいま、この考へを確かめるために、漢の祿秩のことを記した他の記録は無いかと探してみると、たしかに一つある。それは李賢よりはさらに一時代早く太宗の頃に、顔師古が漢書に精しい註を施し、その百官公卿表上の題下に「漢制」なる祿秩制を注記した。彼はその漢制なるものを何に根據して記したか明らかにしてゐない。王應麟は師古のこの注を前漢の祿制であると考へこんで考證までしてゐる。玉海百三十五漢建武增百官奉項考證參照。

しかし不思議なことに師古自身は決して前漢の秩祿制であるとは明言せず、たゞ漠然と「漢制」としてゐるのみである。このことは彼が引用の根據を明示してゐない點と共に、深長な意味があると思はれる。なにゆゑ、かれはこの引用文の出典を明らかにせず、しかも漠然と漢制など、言葉を濁すのであるか。それを明らかにするためには一應李賢所引續漢志と顔引の文とを校合して見る必要がある。いま師古を底とし李氏引くものを以つて校してみよう。

漢制賢三三公三上賢有大號稱萬石其號以下俸月各賢三

百五十斛穀賢其稱 中二千石者賢作 月各無百八十斛二千石者賢作 百二十斛比二千石者百斛千石者九十斛比千石者八十斛六百石者七十斛比六百石者六十斛賢六十作 四百石者五十斛比四百石者四十五斛三百石者四十斛比三百石者三十七斛二百石者三十斛比二百石者二十七斛賢無 百石者十六斛賢下有斗食月十一斛佐史日八錢穀各半

この校合の結果を見ると、李賢所引の續漢志と師古が漠然と漢制としたものとは、たゞ一ヶ所の數字を除いては完全に同じ内容のものであることがわかる。しかもその相異が、李賢所引のものは比六百石の月奉を五十五斛としてゐるのに、師古は六十斛とし、却つて師古の方が正しいと思はれるのである。何となれば、前に引いた通典が引用してゐる善本續漢志は、明らかに六十斛となつてゐるし、師古から引用した冊府元龜卷五〇五も六十斛となつてゐて李賢所引のものは傳寫の誤りを豫想せしめるに充分だからである。かくて師古が據つた原典は王鳴盛もいつてゐるやうに、李賢の引用した續漢志と全く同じものか、十七史商榷卷三十四官奉之條參照、或はたとへ續漢志でないまでも、續漢志のいま吾々の問

題となつてゐる箇所と全く同じことを内容とする、他の種の本ではなかつたかと推測せられる。

\*それは漢官名秩簿などいへられるものであつたかも知れない。師古は別の所、すなはち縣の官制をのべたところに、漢官名秩簿といふ本を引いて「斗食月奉十一斛佐史月奉八斛也」といつてゐるが、この斗食以下の一文は先に底とした師古の引用文の丁度終つてゐるすぐ次に接續すべき内容を有つたものである。もし彼がはたして、この漢官名秩簿なる本を先の注にも引用したのであるとすれば、彼はこの書の本文の初部分を百官公卿表上の題下に必要とするだけ引用し、あとは縣の官制を記した場所の下の注として引用したものとも考へられるであらう。

いづれにしても、師古の據つたと思はれる原典の内容は續漢志の百官受奉例の制と同じであることに相違はなく、それは後漢の制度とすべきである。とすれば漢書の忠臣といはれる師古は自分の引用する原典の性質を知りぬいてゐるはずであるから、それを大膽に西京の舊といひきけることは、どうしてもできぬことであつたであらう。そこで彼は敢へて原典名を記るさなか

つたばかりか、その記るし方まで「漢制」などいふ頗る漠然たる方法を故意にえらんだものと見られる。

かくて師古の注に引用された原典は續漢志百官受奉例にあらずとするも、それと全く内容の同じい他の本で従つて後漢の祿秩制を記したものであり、それは李賢所引の續漢志の文と完全に一致し、わづかに異なる一ヶ所も、却つて師古の注文によつて李賢所引の文の誤りを正すことさへできるのである。かうして正された顔注と李賢所引續漢志は、たゞに完全に一致するのみならず、事理もまたよく協ふものであつて、王先謙がAを非として直ちに顔注をとつてもつて是なりとしてゐることには道理があるといはねばならぬのである。

百官公卿表  
上補註參照

たゞこの際氣にかゝるのは冊府元龜卷五百五、邦計部俸祿門參照

が、たしかに顔注に據つたに相違ないと思はれるのになほ千石の月奉を八十斛とし比千石の月奉を記してゐない點である。しかしこれも恐らくは先の不良宋本と同一の手續きによつて本稿二十頁參照不注意な校合がなされ、その結果不當な筆削、加筆が行はれたものとすべきではなからうか。いまのところ吾々にはこれ以上の

解釋は見當らないのである。

以上諸考證の結果を圖示するとAは結局左の如くならねばならぬであらう。

第 一 表

建武二十六年 受奉例	月 奉	備 考
中二千石	180斛	
二千石	120	
比二千石	100	
千 石	90	師古引、李賢引ニ ヨリテ改ム
比 千 石	80	師古引、李賢引ニ ヨリテ補フ
六 百 石	70	
比六百石	60	師古引通典卷36、 元龜ニヨリテ改ム
四 百 石	50	師古引、李賢引通 典36、元龜玉海ニ ヨリテ改ム
比四百石	45	同 上
三 百 石	40	
比三百石	37	
二 百 石	30	
比二百石	27	
百 石	16	
斗 食	11	
佐 史	8	

二

さてこの建武二十六年の月奉例の定めによると、月奉は半錢半穀で給せられることになつてゐる。しかし、この半錢半穀の意味を果して文字どほり、五〇プロツエントの錢奉と五〇プロツエントの穀奉といふ意味に解してもよいかどうかには少しばかり疑問がある。何となれば續漢志の注補に劉昭が擧げてゐる後漢延平中の月奉支給

例——これは元來荀綽が晉百官表注に引用してゐたものを劉昭が孫引きしたものである。——に據るに、それにおいては、決して文字通り半錢半穀でなく、むしろ別な比率が用ひられてゐることが發見せられるからである。いまその文を左に示すと、

荀綽晉百官表曰漢延平中二千石奉錢九千米七十二斛眞二千石月錢六千五百米三十六斛比二千石月錢五千三百三十四斛一千石月錢四千三百三十斛六百石月錢三千五百米二十一斛四百石月錢二千五百米十五斛三百石月錢二千米十二斛二百石月錢一千米九斛百石月錢八百米四斛八斗

である。先に圖表化した受奉例は建武以後改められたといふ記録は無く、古來から學者によつて後漢一代の定制とみなされて來たものであるから通典、冊府元龜、玉海、それは、延平中の月奉支給例においても當然にまた根本的のものとして準則とせられたに相違ない。いま左に建武の定制と延平中の月奉支給例とを綜合した表を示さう。

第 二 表

建武十六年 受奉例		延平中月奉 支給例		備 考			
秩 A	俸 B	奉 C	穀 D	延平中錢ニテ 支給セラルベ キ月奉ノ額	延平中錢ニテ 換算 ノ額 E	ト ノ 比 率 F	延平中月奉支 給例ノ概價 G
中二千石	180斛	9000錢	72斛	108斛	6 : 4		83.3錢
二千石	120	6500	36	84	7 : 3		77.38
比二千石	100	5000	34	66	33 : 17		75.75
千石	90	4000	30	60	2 : 1		66.66
比千石	80						
六百石	70	3500	21	49	7 : 3		71.42
比六百石	60						
四百石	50	2500	15	35	7 : 3		71.42
比四百石	45						
三百石	40	2000	12	28	7 : 3		71.42
比三百石	37						
二百石	30	1000	9	21	7 : 3		47.62
比二百石	27						
百石	16	800	48	11.2	7 : 3		71.42
斗	11						
佐史	8						

この表をちつと見てゐると、EとDの比率、すなはち錢穀の割合は決して文字通り半錢半穀などではなくて却つて七對三のものが絶對多數として現はれてゐることに氣づく。それゆゑ、いはゆる半錢半穀とは具體的には錢奉が七割で穀奉が三割支給せられることをい



つたものであると考へて差つかへないと思はれる。しかし、この表上の數字には猶ほ疑問の點がいくつかある。それを充分正してからでないといふと、七對三の割合を斷言することはひかへねばならぬ。

第一に七對三の比率は絶對多數ではあるが異つた比率も三つ出てゐる。この三つの比率はいづれも一致しないまじ／＼のものである。これらの比率が、はたして正しいものかどうかといふことは可能な限りの計算的方法によつて決定せらるべく、表を見てゐるだけでは何もいふことはできない。第二に、EとDの比率が同じである以上は一斛あたりの穀價もまた同一でなければならぬ。しかるに、二千石と二百石の場合にはEとDの比率が七對三でありながら穀價には相違がある。これも合理的な方法による改訂が必要である。そこでこれから斯る不可解を是正し合理化して見ようと思ふ。

七對三の比率は第二表上では絶對多數であるから、いまかりにこれを中二千石と比二千石の場合にも適用して、果して理に協つた結果が出るかどうかを調べて見よう。中二千石は月奉百八十斛を受けるものである

から、それを七對三に分けると、錢に換算して受けるべき月奉の斛數は百二十六斛となり、穀のまゝで受けるべき月奉の斛數は五十四斛である。また、比二千石は月奉百斛を受けるものであるから、それを七對三に分けると、錢に換算して受けるべき月奉の斛數は七十斛となり、穀のまゝで受けるべき月奉の斛數は三十斛となる。いづれの場合も一斛當りの穀價は七一・四二錢となる。この穀價は第二表中最も多く現はれてゐる價で、しかもその總べてが七對三の比率のものに限られてゐる。それゆゑ一斛當り七一・四二錢といふ穀價或はその近似値を有つた整數は、延平中月奉支給例の計算の基準となつたものであると斷言できると思はれる。少くも本表中では七對三といふ比率と共に重要な數字であることは確かとなつた。さてかくの如き計算の結果によると果然、中二千石の月穀奉數七十二斛、比二千石の月穀奉數三十四斛は、それ／＼五十四斛、三十斛の誤りとすべきことが明らかとなる。

次に、前述の考證によつて一斛當りの穀價七一・四二錢といふ數字は、七對三といふ比率と共に極めて重要なものであることが證されたが、いまこの二つの重

要にして有力な數字を利用して、二千石と二百石の月錢穀奉の數字に見られる不合理性を正して見よう。二千石が錢に換算してうけとるべき月穀奉の斛數は八十四斛、二百石のそれは二十一斛である。そしてこれはそれ／＼月穀奉三十六斛、九斛に對して、七對三の比率をなす數字である。いまこの八十四斛、二十一斛を一斛當り七一・四二錢として錢に換算すると、それぞれ、五千九百九十九・二八錢及び一千四百九十九・八二錢となり、正式の奉數としてはそれ／＼六千錢及び千五百錢にあたることとなる。されば兩者が一は六千五百錢として、一は一千錢として傳へられてゐるのは確かに誤りとしなければならぬ。

こゝまでわかると、次には千石の場合に豫想せられる誤謬も考へやすくなる。千石の月奉は九十斛であるから、それを七對三に分けると六十三斛と二十七斛となる。六十三斛を錢に換算すると四千四百九十九・四六となるから、千石者の月奉錢は正式には四千五百錢でなければならぬこととなる。

かう考へて來ると延平中の月奉の錢穀の割合がすべて七對三であり、その奉制の基準となつた穀價は一斛

あたり七一・四二錢或はその近似値の整数であつたといふことは、殆ど絶對的確信をもつて斷言できるところとならう。されば建武の受奉例の規定の半錢半穀といふことは少くも延平の月奉制では文字通り行はれたのでなく、七對三の割合で行はれたのである。しかし更に溯つて、前漢に残つてゐる極く僅かな史料を通じて、前漢の制度を探ぐつて見るとやはりこの七對三の錢穀奉制が行はれてゐたことが窺はれるのである。いまその證明に立入る前に猶ほ延平の月奉制について誰でも氣のつく著しい點に關して若干の憶測を述べておきたいと思ふ。この月奉制には比秩の斛數はたゞ比二千石が記るされてゐるのみでそれ以下は悉く眞秩だけが記るされてゐるに過ぎない。

大體後漢書には比秩が廢止せられたといふ記載は見當らない。恐らくは、原本となつた延平中の月奉支給例の本文には、詳細に比秩の數字が記載せられてゐたと想像することは無謀ではなからう。にも關らず劉昭所引のものにそれが少しも見えぬのは、恐らく荀綽が晉百官表注に延平中の制を引用する時すでに省略したか、或は又劉昭が晉百官表注からさらに、孫引きする

時に省略したかの二つが考へられるが、吾々は事情から考へて前者に蓋然性を認めたい。なんとすれば荀綽は後漢の官制について、必ずしも精密なる文献を必要とする立場にゐないけれども、劉昭は後漢のことを記した續漢志に注補を試みるのであるから、その引く後漢の文献は出来るかぎり精博を求めることは當然である。それゆゑ、彼がことさら延平中の月奉制に省略を加へたとは考へにくいふしがあるからである。それはとにかくとして延平中の月奉制には比千石以下の比秩の錢穀奉數は全然記るされず、他にそれをうかゞふに足る資料も見當らないので、今日においては補ふ道がないやうにも思はれる。しかしいま七對三の數字と七一・四二錢といふ穀價を武器として算出するなればそれは第三表に\*を付して示しておいたやうなものとなるであらう。第三表は第二表を考證改訂した結果生じたもので、後漢延平中の正しい月奉數を示したものである。\*を付したもののうち、比千石の月錢奉は四千錢であるが、この數字は現今見られる總ての續漢志注補及びそれを引用した文献には、いづれも千石の月錢奉となつてゐて、極めて古るい傳來となつてゐる。

第 三 表

建武二十六年 受奉例		延平中 月奉給支例		備 考			
秩 A	月 奉 B	奉 錢 C	奉 穀 D	延平中 月奉給 支例 E	比 率 F	延平中 月奉給 支例 G	延平中 月奉給 支例 H
中二千石	180斛	9000錢	54斛	126斛	7:3	71.42錢	
二千石	120	6000	36	84	7:3	71.42	
比二千石	100	5000	30	70	7:3	71.42	
千石	90	4500	27	63	7:3	71.42	
比千石	80	*4000	*24	*56	7:3	71.42	
六百石	70	3500	21	49	7:3	71.42	
比六百石	60	*3000	*18	*42	7:3	71.42	
四百石	50	2500	15	35	7:3	71.42	
比四百石	45	*2250	*13.5	*31.5	7:3	71.42	
三百石	40	2000	12	28	7:3	71.42	
比三百石	37	*1850	*11.1	*25.9	7:3	71.42	
二百石	30	1500	9	21	7:3	71.42	
比二百石	27	*1350	*8.1	*18.9	7:3	71.42	
百石	16	800	4.8	11.2	7:3	71.42	
斗食	11	*550	*3.3	*7.7	7:3	71.42	
佐史	8	*400	*2.4	*5.6	7:3	71.42	

しかし、千石の月奉錢は理論上四千五百錢でなければならぬことは、すでに證明した通りである。さればこれを四千錢としてゐるのは、いかに傳統的に古くとも、とるに足らぬ誤りである。この誤りが、かく古くから傳へられたのは、そもく荀綽が延平中の制を

省略記載する時に、比千石の月奉錢四千を誤つて千石のそれとして採録したことに由來してゐるのかも知れない。

## 三

さて前項で論述したやうに、後漢においては奉祿は七對三の割合で錢と穀とが支給せられたことを證明し得、建武制の半錢半穀といふ語は文字通りに解すべきものではないかも知れないといふ疑問を提出しておいたが、この錢穀奉の割合七對三なる比率は前漢においても、恐らく用ひられてゐたのではないかと考へられる。前漢時代にも奉祿が錢と穀とで支給せられたことは東方朔傳漢書卷六十五に「朱儒長三尺餘奉一糶粟錢二百四十臣朔長九尺餘亦奉一糶粟錢二百四十云々」とあることによつて明らかである。その割合が七對三であつたらうといふ推測は貢禹の言葉によつて立てるのである。すなはち、漢書卷七十二の貢禹傳に、

禹上書曰臣拜爲諫大夫秩八百石奉錢月九千二百又拜爲光祿大夫秩二千石奉錢月萬二千

とある。王先謙の研究によると諫大夫の秩は比八百石

又光祿大夫の秩は比二千石でなければならぬことが百官公卿表からして明言できる。補注ゆゑにいま、それ比字を補つて考へよう。さて貢禹が諫大夫や光祿大夫になつたのは、いづれも元帝の即位當時のことであり、彼が光祿大夫になつた年については周壽昌が考證してゐるが、それによると禹の歿年に同じい初元五年である。漢書註校補卷四十四元帝即位の初年初元元年頃は禹の傳にも、「是時年歲不登郡國多困」とあり、食貨志上にも「初元二年齊地饑穀石三百餘民多餓死」とあるやうに、穀價はやうやく高くなりつゝあり、遂に永光二年頃になると「京師穀石二百餘邊郡四百關東五百四方饑饉」漢書卷七十九といふありさまになつてゐた。初元二年から永光二年まで約六ヶ年の間に、齊地をもふくめた關東の穀價は約一・六六の騰貴を示してゐる。この騰貴率をもつて初元二年當時の京師の穀價を計ると約百二十錢である。京師の穀價はこれより漸騰の傾向を示したであらうことは元帝紀に現はれた連年の饑饉狀態から充分推測でき、かくて遂に永光二年には二百餘錢に至つたと見られる。いまこゝにいたる毎年の穀價の騰貴高を平均十三・三錢としよう。すると、貢禹

が光祿大夫となり、ついで御史大夫となつて元帝歿するにいたつた初元五年には京師の穀價は約百七十三錢を示してゐたことになる。

さていま建武二十六年の受奉例によれば、比二千石の月奉は百斛である。光武紀の同年條によれば、この時千石以上の月奉は西漢の時より少しく減ぜられたのであるが、その數字は明らかでない。勿論減じたといつても、そんなに莫大に減じたわけではなかつたらう。現に漢書の忠臣といはれる顔師古が建武の月奉制をそのまゝ用ひて西漢の奉祿制を考察してゐることから推しても古來の學者はみなこの方法を用ひてゐる。西漢と東漢の奉數に大なる差をつけて考へる要はなからうと思はれる。それゆゑ、西漢の比二千石の月奉はたとへ建武の定制より若干多いとしても、大して差のあるものではなかつたらうと考へる。恐らく百斛或はそれを少しばかり出た數であつたらう。いまこの時代の穀價を百七十三錢として百斛を少しばかり越える斛數を錢に換算すると約一萬七千三百錢となる。比二千石はこのうち一萬二千錢を錢奉で受けるのであるから、残り五千三百錢は穀奉で受けるべきものである。いまこの一萬二千錢と五

千三百錢の比を見ると六・七對三となる。殆ど七對三に近似してゐる。精密な計算が不可能であるにも關らずなほ、かゝる數字を得られるところをもつて見れば、西漢時代にもまた七對三の錢穀の比率が用ひられてゐたとすることは殆ど鐵案といつてよからう。

(昭和十五年五月十三日稿)

## 追記

後漢末桓帝頃の人崔寔は當時の縣の令長の奉祿を記して「夫百里長吏荷諸侯之任而食監門之祿：一月之祿得粟二十斛錢二千云々群書治要卷四十五政論」といつてゐる。これと、延平中の錢穀受奉の制とは、いかなる關係にあるかを考へるに、後漢時代の縣の令長の秩は大なる者で千石、次が四百石、次が三百石であると續漢志の縣の官制のところには記してある。杜佑によると猶この他に六百石の縣令もあつたといつてゐる。通典卷三十六第三表によつて、これらの秩の月穀奉、月錢奉を調べると、崔寔の言はそのどれにも當らない。恐らく彼が縣の令長の月奉としてゐる數は、これら令長の各級の月奉數を平均して、その大約の數を掲げたものであらう。さうすれば彼が月粟二十斛としてゐるのはわかるが、月錢二千としてゐるのは延平中の錢奉の平均數に比するとずつと低いといふ疑問が起る。しかしこれは桓帝時代の穀價が延平中よりか遙かに安價であつたためではないかと思はれる。要するに崔寔の傳へてゐる奉制の片鱗も延平中の制、ひいては建武の制とそれ程變つたものでないとしてよからうと思はれる。